

顔が見える農業

JAきたみらい「スイカ研究会」



8月に初めて行われた「スイカ祭り」

昨年、柏丘の6戸の農家がスイカを試験栽培、今年は本格的に栽培し、スイカ祭りを開催するまでになりました。

訓子府町は、メロンでも有名ですが、そのメロン栽培の技術に近いスイカを栽培しようと始まり、出荷をめざした本格的なスイカ栽培は訓子府町では初めてです。

23年度は、北見市内の農家も含め9戸で23アールを作付しました。品種は「紅まくら」という楕円形になるスイカで、今年8月に初のスイカ祭りを開催、売れ行きも良く、味も好評でした。

この祭りは「顔が見える農業」をめざしているファーマーズマーケット「夢ミール」と連携して行われ、訓子府の農業に新たな取り組みがまた一つ誕生しました。

訓子府の元気 農業

農業振興へ 新たな取り組み

訓子府町の基幹産業である農業。8月から9月の長雨の影響で収穫作業が遅れ気味で、作物によっては、作柄が心配されるものもあります。

しかし、そうした中で農業そして「訓子府の元気」をつくるためにさまざまな農業者グループが新しい取り組みを行い、町内の産業全体を活気付けています。

てん菜をめぐる近年の状況

輪作に不可欠な作物 作付減の危機感から 新たな展開へ

寒冷地作物として「てん菜」は、畑作農業における輪作体系の維持・確立に不可欠な作物で、地域経済の面からも重要な作物です。

しかしながら、その生産については、農業者戸別所得補償制度への制度変更や昨年産の作柄不良により、作付面積のさらなる落ち込みが懸念される厳しい状況となっています。(町内では平成12年の1,140haをピークに徐々に減少してきており、平成23年では919ha)

輪作体系におけるてん菜の主なメリットとして、

- ① 土壌等の改善(深根性作物による根域確保、透水性向上)
- ② 地力の維持(輪作作物の中で堆肥を投入しやすい、茎葉すき込みによる窒素・カリの補給)
- ③ 病害の防除(連作・交互作による土壌病害の防止)



があります。

本町では省力化のための直播栽培(種を直接、畑にまく栽培方法)が他地域に比べ進んでおり(平成23年作付面積のうち約270ha)、今後の作付を増やすためには「移植栽培並みの収量を上げるような品種開発」が望まれています。

てん菜の「てん」を漢字で書くと「甜」、舌に甘いと書き「砂糖」の原料となる訳ですが、「砂糖をとると太る」など科学的に根拠のない誤解や消費者の甘味離れもあり、国内では砂糖の消費量が年々減ってきています。

砂糖には、栄養面、調理面でさまざまな働きがあります。消費者の皆さんには、砂糖と食生活についてあらためて考えていただくことが、農業者にとって新たな農業振興につながるものと期待しています。



北大マルシェと訓子府サテライト

訓子府農業のアピールに向けて

「北大マルシェ」とは、北海道大学と酪農学園大学、帯広畜産大学の「北の3大学連携」の「食の安全・安心基盤学」の一環として行われている「農産物の市場」です。

今年で2回目となる北大マルシェは、8月に北大農学部前で開かれ、全道各地から生産者や関係機関がブースを設置し、地元の農産物や加工品を販売し、生産者と消費者との交流を図っています。

このイベントには昨年に引き続き、北大訓子府サテライトとして生産者の参加を募り出店。ハチミツや有機栽培の玉ねぎ、ミニ野菜などを販売しました。また、訓子府町に実習に入った北大と酪農学園大の大学院生が、実習先の農家から農産物を提供いただき大学院生自らが販売する形態もとりました。

こうした形態での販売は、出店した生産者、さらに消費者にも好評でした。ただ、課題も見つかり個人の販売だけではなく、「訓子府町という町や農業のイメージをどうアピールするか」、「複数の農家が地元の食材を複数使い共同作業による調理品などを提供し、消費者が興味を持つような仕掛けづくりが必要」ということが分かり、今後の発展に大きな期待が寄せられています。